

# 明治期における幼児教育の展開

## — 愛知県の事例 —

The Development of Infant Education in the Meiji Era  
: The Case Study of Aichi Prefecture

青山佳代

Kayo AOYAMA

### はじめに

日本における幼児教育は、1876（明治9）年の東京女子師範学校附属幼稚園が創設されたことに始まったとするのが定説となっている。しかしそれ以前にも「幼稚園」に類するさまざまな試みはあった。たとえば、1871（明治4）年には、米国婦人一致外国伝道教会により横浜に「アメリカ婦人教授所」が設立され、保育と女子教育が行われた。また、1875（明治8）年12月には京都の柳池小学校に「幼穉遊嬉場」が附設され、保育が開始されていたことが知られる<sup>1)</sup>。

そして愛知県においても、伊澤修二が官立愛知師範学校の附属小学校で幼年生徒に唱歌と遊戯を教授し、幼児教育の試みを行ったと言われている。しかも伊澤がその試みを行ったのが日本初の幼稚園である東京女子師範学校附属幼稚園が創設される前の1874（明治7）年であったことは、興味深い。ところが、この伊澤による幼児に対する教育実践に関しては、伊澤本人の記述や、口述による史料からしか判断できていない。よって、これまでの研究成果においては「疑問の多い伊澤修二の教育施設<sup>2)</sup>」というのが定説となっている。

さて、本稿では明治期の愛知県における幼

児教育、とりわけ幼稚園の設置・展開について考察する。第1節では、伊澤修二によって行われたとされる幼児教育実践について、これまでの先行研究、ならびに伊澤本人の幼児教育に関する文献を活用しながら考察する。第2節では、伊澤による幼児教育実践以降の、愛知県における幼稚園開設の動きを『愛知県学事年報』（明治33年から40年度分）、『愛知県教育史』、『愛知県史』といった史・資料を活用しながら分析する。このような分析視角を通して、愛知県における幼児教育の展開を歴史的に整理し、その特質について考察したいと思う。

### 1 伊澤修二の教育活動

#### (1) 伊澤修二と官立愛知師範学校

伊澤は1851（嘉永4）に信濃国（長野県）伊那高遠藩の下級武士の家に生まれた。藩儒教中村黒水の影響を受けて早くから和漢洋三学を学び藩校進徳館寮長と鼓役を務めた。1870年に上京し、大学南校貢進生に挙げられて頭角を現し、第一番中学幹事を経て1874（明治7）年に官立愛知師範学校の初代校長となった<sup>3)</sup>。

当時、明治政府はわが国に近代教育を導入

し、その普及をはかるために、1872（明治5）年に学制を發布した。これを全国で実施するためには、近代教育を授けることのできる教員の養成が急務であった。また近代的な教育課程の編成および教科書の編集が必要であった。そこで文部省は師範学校を設置することとした。1874年3月に官立愛知師範学校の初代校長となった当時伊澤はわずか22歳であった。生徒も大部分は伊澤より年長であつたらしい。同年6月に校舎も竣工し、同年7月13日に開校式が行われた。開校に際して伊澤は生徒に対しての「告諭<sup>4)</sup>」を記した。これにより、伊澤の教育思想と当時の時代情況を知ることができよう<sup>5)</sup>。

#### 告 諭

夫レ教法ノ変遷ハ世運ニ従ヒ而シテ世運ノ変遷ハ人力ノ能ク維持スル所ニ非ズ、我国往古ヨリ今日ニ至ル迄其改革幾千百回ナルヲ知ラズト雖モ、其最モ緊要ニシテ開花ノ緒ヲ開キシハ実ニ戊辰ノ一大改革ナリ、（中略）壬申ノ歳学制ヲ創定シ、之ヲ国中ニ頒布シ教育ノ一大改革ヲナセリ、爾後人民亦振刷滌蕩皆学ノ修ムベキ身ノ立ツベキヲ知り、虚ヲ棄テ実ニ就キ文運漸ク隆盛ニ至ントス、然クシテ而シテ邑ニ尚不学ノ戸アリ、家豈不学ノ人ナカラシヤ、是レ他ナシ、教員未ダ其人ヲ得ズ、教則未ダ其方ヲ得ザルヲ以テナリ、是ニ於テ官師範学校ヲ設立シ良師ヲ養成シ教則ヲ甄覈ス、是諸彦ノ知ル所ナリ、今諸彦能ク上旨ヲ奉戴シ奮然ヲ負テ此ニ雲集シ軋チ教科ヲ試験ヲ経テ此校ニ入ルヲ得タリ、今浅学非才ト雖モ公命ヲ奉ジテ此校ニ在リ、苟モ一朝諸彦ニ長タルヲ以テ敢テ教育ノ真理何者タルヲ質サン、抑今日ノ教育ハ大ニ古ノ教育ニ異ナリ、惟一般ニ誦読吟詠習字等ヲ指シテ教育ト

云ニ非ズ、之ヲ要スル均シク身体才智心気ノ三者ヲ教育シ、不偏不倚ノ良材ヲ得ルヲ以テ其目的トス、故ニ唱歌体操ノ科ヲ以テ精神ヲ健快シ材幹ヲ長成シ支体ヲ強壯ニス之ヲ身体ノ教育ト云（下線筆者）、理芸法文ノ諸科以テ努力ヲ開発シ才芸ヲ長育ス之ヲ才智ノ教育ト云、修身性理ノ科以テ天理人道ヲ明ラニシ善惡邪正ヲ弁ジ權利義務ヲ知ラシム之ヲ心気ノ教育ト云、此三者ハ実ニ教育ノ枢要ニシテ並ビ行ハレテ相悖ラズ、然レバ則盛花陋俗富強貧弱唯此三者ノ教育能ク行ハル、ト行ハレザルト不偏不倚ノ權衡ヲ得ルト得ザルニ関センノミ、而シテ今其柄ヲ執ルモノハ諸彦ニ非ズシテ誰ゾヤ、嗚呼諸彦能ク此意ヲ体シテ報国尽瘁勉勵以テ国家ヲ助ケバ郁々ノ盛洋々ノ美亦源ヲ此校ヨリ發センコト必セリ、諸彦欽哉、

明治七年七月

愛知師範学校長 伊澤修二

この告諭の文章から、伊澤が愛知師範学校で最高の教員養成教育を行い、最高の教員を輩出しようとする心意気がうかがえる。加えて、伊澤の教育思想のうち、唱歌と体操を身体教育をして掲げ、それを重視していることが注目できる。このことは、伊澤が愛知師範学校に赴任した当初から、唱歌と体操に深い関心をよせていたと解釈できる。

さらに、伊澤は1875（明治8）年に、文部大輔田中不二麻呂宛に愛知師範学校年報（文部省第二年報所収）を提出している。師範学校年報は、他の官立師範学校の年報とともに収録されているが、伊澤が報告した愛知師範学校のもので、他校の年報と比して、最も詳細に記載されている。さらに注目されることは、たんに師範学校の規則や実情の報告のみではなく、伊澤の教育意見が4つの項に立て

られ、述べられていることである<sup>6)</sup>。それらは「将来學術進歩ニ付須要ノ件」のなかに収められ、(1)「唱歌遊戯ヲ興スノ件」、(2)「算術教授上指数器ヲ用ルノ件」、(3)「記簿用筆算ヲ設ルノ件」、(4)「中学師範学校ヲ設置スヘキノ件」である。このうち、(1)「唱歌遊戯ヲ興スノ件」について、伊澤は次のように述べている。

唱歌ノ益タルヤ大ナリ、第一知覚心経ヲ活發ニシテ精神ヲ快樂ニス、第二人心ニ感動力ヲ發セシム、第三発音ヲ正シ呼法ヲ調ブ、以上ハ幼生教育上唱歌ノ必欠ク可ラザル要旨ノ概略ヲ挙グルノミ、其細目ノ如キハ蝶々此レニ弁ゼズ、我文部省早ク此ニ見アリテ小学教科中唱歌ヲ載スト雖ドモ未ダ実ニ其科ヲ備フルモノアラズ、今吾輩西洋ニ於テ著名ナル教育士フレール氏其他諸氏ノ論説に従ヒ、先本邦固有ノ童謡ヲ折衷シテ二、三ノ小謡ヲ制シ、日ヲ累ネ年ヲ積テ大成全備ノ効ヲ奏セントコヲ期セリ、即チ其一、二例ヲ左に示ス、

伊澤は同年報のなかで、唱歌を奨励する理由として、①知覚神経と活発にし、精神を快樂にすること、②人の心に感動する力を培うこと、③発声を正しくし呼吸を整える効果があることの3つを挙げた。

加えて、唱歌と技態（＝遊戯）を示している。そこには『椿』、『胡蝶』、『鼠』の例が示されている。『胡蝶』については次のとおりである。

胡蝶

唱歌

蝶々蝶々。菜ノ葉ニ<sup>(ママ)</sup>止レ。菜ノ葉ニ飽タラ、桜ニ<sup>(ママ)</sup>遊ヘ。桜ノ花ノ、栄ユル御代ニ、

止レヤ遊ベ、遊ベヤ止レ。

技態

右ノ手ト右ノ手ヲ執替ハシテ向背相反シ両児ヲ一蝶トナス。凡十五名ニ一羽三十名ニ二羽ホトヲ度トス衆児ハ互ニ手ト手トヲ引合ヒ一大園ヲ造リテ輪走ス彼蝶ハ私転シナカラ園外ヲ公転ス園児ト蝶児トハ逆転スヘシ二羽ナラハ左右ニ位シ四羽ナラハ四隅ニ位シ一齊ニ唱吟シ出ルヲ期シテ転旋ヲ始ムヘシ且謡ヒ且走リテ結句ノ止レト云フ詞ト共ニ出遇フ所ノ園児ノ執合ヒタル手ヲ執フヘシ執ハレシ者ヲ再度ノ蝶トス。

<sup>(ママ)</sup>地球ノ自転シテ太陽ヲ周回スルニ倣フ地動説を教フルニ及ンテ比喩ノ一助タランコトヲ要ス

この『胡蝶』はのちに1908（明治41）年『小学唱歌集』（文部省音楽取調掛編）にも収録された。伊澤の自伝のなかで、「師範学校の一事業として、今日の幼稚園に似た仕た。即ち幼い子供を集めて遊戯唱歌を教へたのであって、今日全国唱われる蝶々の歌（小学唱歌集初編）の詞は、全く此時に出来たのであった<sup>7)</sup>」と述べている。つまり、愛知師範学校において、幼い子どもを集めて伊澤は、蝶々の歌を作ったというのである。

## (2) 幼児教育における伊澤修二の評価

さて、ここで伊澤修二による幼児教育施設の有無について考えてみることにする。前項において伊澤の生い立ちから愛知師範学校校長における伊澤の教育思想について考察してきた。そのなかで、伊澤が同師範学校への赴任時に『蝶々』を作ったことは明らかとなった。

では、実際に伊澤は愛知師範学校で、どのようなかたちで幼児教育を行ってきたのであ

ろうか。このことについて、本項では、これまでの先行研究を整理・検討するという方法を用いて考えてみたい。

岡田正章ら(1968)は、「日本幼児保育史」のなかで、伊澤の「幼稚園に類する仕事をした」という文言に対して「伊澤が保育施設を作ったとするには疑問が多い」としている。その理由について、岡田らは伊澤が愛知師範学校に赴任した当時幼稚園があったという証拠となる史・資料を発見できなかったことを挙げている。その後も岡田らの見解に同調する研究成果(岡田ら(1983)、細田<sup>8)</sup>(1996))が相次いでいる。

ただし、山住正巳(1971)は「附属の幼稚園では、唱歌と遊戯の指導を試みており、これまた、東京女子師範より一足早かった<sup>9)</sup>」としているし、森下正夫(2009)も「附属の幼稚園を設けここで初めて唱歌や遊戯を教えた。(中略)のちの音楽教育の基礎を作る修二の音楽への関心はこのころに萌している<sup>10)</sup>」とある。さらに、伊澤自身が1901年と1906年に雑誌『婦人と子ども』で幼稚園に関する意見を述べていることを鑑みれば、今後も伊澤による愛知師範学校における幼児教育実践ならびに施設に関する資・史料の発掘が待たれるところである。因みに伊澤は1901年の同誌のなかで「幼児に課する唱歌遊戯の話」と題して、幼稚園における唱歌・遊戯の重要性を述べているのである。くわえて「また幼稚園の教がなかつた故、最下級には学齡未滿のものも入れ、今日の幼稚園如き仕事もしたことです<sup>11)</sup>」と語っている。

とはいえ、確定に耐えうる資・史料がない現状からは、伊澤が幼少の子どもを集め、唱歌を教えたのは確かだが、幼稚園という施設を建設するまでには至らなかったとするのが、現在のところは妥当といえよう(下線筆者)。

以上、ここまで伊澤修二の官立愛知師範学

校における教育活動を考察してきた。その結果、伊澤が音楽教育に関心を持ち、子どもに対して唱歌によって音楽教育を施す重要性を感じていたことが明らかとなった。幼児教育施設そのものは特定できなかったが、愛知県において伊澤は幼少の子どもに対して教育を施そうとしていたことは明らかであろう。

伊澤が愛知師範学校で活動した期間というのはたった一年あまりであった。けれどもその後の幼児教育、ならびに初等教育の普及ならびに教員養成に大きな貢献をしたことを考えると、伊澤の同師範学校での活躍は重要な意味をもつものと考えられる。

## 2 愛知県における幼稚園開設の動き

### (1) 明治20年代の愛知県における幼稚園設置状況

全国的な公立・私立の幼稚園の設置・廃止については文部省布達により1879(明治12)年11月に定められた。愛知県では、1881(明治14)年6月28日に「町村立私立学校幼稚園図書館等設置廃止規則」が制定された。これは1880(明治13)年の改正教育令第22条に基づく「町村立私立学校幼稚園図書館等設置廃止規則制定心得」に従って定められた。しかしながら、それまでに愛知県下に「幼稚園」はまだ開設されていなかった<sup>12)</sup>。

管見の限り、伊澤による幼児に対する教育実践以後、愛知県に初めて創設された幼稚園は、1888(明治21)年の私立愛知女学校附属幼稚園である<sup>13)</sup>。愛知女学校の生徒のための保育法実習施設を兼ねて同幼稚園は開設された。以下の〈表1〉に同幼稚園の規則を記す。

〈表 1：愛知女学校附属幼稚園規則〉

愛知女学校附属幼稚園規則

第一条 附属幼稚園ハ本校生徒をして保育法を実地に練習せしめ兼て幼児に保育を施す所とす

第二条 当園に於て授くる所の保育方法ハ室内室外の二とし室内にては話、積み方、排へ方、細工、画き方、書き方、集会、数へ方、唱歌とし室外にてハ遊戯、実〔物〕とす

第三条 当園の幼児ハ年齢大約三年以上六年以下とす

第四条 幼児ハ大約年齢のよりて之を一の組二の組三の組四の組の四級に分つ

第五条 保育の場所ハ遊戯室、開誘室、庭園とす

第六条 保育の時間ハ各課二十五分とす

第七条 保育の日数は毎年大約三十六週にして時数は毎週一の組及び二の組は二十二時三十分三の組及び四の組は二十時とし毎日保育時数は一の組及び二の組は四時三の組及び四の組は三十分とす

但し毎日始業は日の長短による午前八時乃至九時に始むるものとす

第八条 一課の開誘終る毎に庭園又は遊戯室に於て随意に遊嬉運動及び唱歌をなさしめ以て其鬱屈を暢開すへし

第九条 休業ハ左の如し

大祭日 祝日 夏期五週日 冬期二週日 土曜日午後 日曜日

第十条 （筆者略）

第十一条 保育の要旨左の如し

一 当園ハ学齡未滿の幼児を保育し以て家庭の教育を補くる所なれハ力めて幼童の稟性を基本し適応の方法を設け優遊和樂の際自ら其徳性を涵養し智能を開誘し心身の發育を助け兼て知らず識らず身を規律の中に容るゝに慣れしめ以て学校教育の階梯を得せしむるを要す

一 話に於てハ専ら近易なる日々の実例内外古今の美事を挙げ又ハ実物図画標本等に幼童適切なるものを談話し且つ日常の作法を教へ兼て応答にて言語を習はしめ力めて善良なる性質習慣を養成せんことを要す

一 積み方排へ方細工等に於てハ木片小板環豆等を以て諸物の形狀を積まして又ハ色紙色糸等を以て諸種の形狀を作らしめ以て手指の運用に慣れしめ幼児をして自然工夫構造の力及び審美の心を養ひ兼て線角辺面形体大小長短等の積合を得せしめんことを要す

一 画き方に於てハ初めに石盤に縦横様の諸線を書き運筆に慣れしめ次に之を結合して短形の画き方を教へ終りにハ鉛筆を以て之を紙上に画かして以て脳と手とを伝習せしめんことを要す

一 数へ方に於てハ果物小石介殻等の実物によりて之を以下の計数を習はしめ兼て十以下の数字を教へんことを要す 一 書き方に於てハ幼児の熟知せるもの、名称等に由りて片仮名平仮名を以て綴りたるものを黒板に示して其読み方及び書き方を習はしめんことを要す

一 集会に於てハ諸組の幼児を一所に集め唱歌を復習せしめ優美の性質を養成し交誼の情を助成し且つ時に作法等に付きて訓誨を加へんことを要す

一 唱歌に於てハ容易くして面白き口授歌を用ひ音調純正なる楽器を以て之を和して専ら其徳性を養はんことを要す

一 実物に於ては幼童の易き実物を示して之を説明し以て注意を起し実物の觀念を得しめ兼て各課の復習をなさしめんことを要す

一 遊戯に於て幼児に適切な遊戯を撰ひて之をなさしめ以て身体を健康にし精神を爽かならしめんことを要す

第十二条 教科用具ハ別表の通り （以下略）

（以下第十七条まで筆者略）

上記の規則から、同園の保育内容は「話」、「遊戯」、および「実物」の11項目であったことがわかる。「積み方」、「排へ方」（並べ方）、「細工」、「画き方」、「書き方」、「集会」、「数え方」、「唱歌」、

〈表2：愛知女学校附属幼稚園における保育内容一覧〉

	一の組（3歳児） 【週ごとの時数】	二の組（4歳児） 【週ごとの時数】	三の組（5歳児） 【週ごとの時数】	四の組（6歳児） 【週ごとの時数】
話	・近易の話 ・日用の作法 【1】	・近易の話 ・日用の作法 【1】	・近易の話 ・日用の作法 【1】	・近易の話 ・日用の作法 【1】
積み方	・諸物形【1】	・諸物形【0.5】	—	—
排へ方	—	・板排へ【0.5】	・板排へ ・箸排へ 【1】	・箸排へ ・環排へ 【1】
細工	—	—	・紙細工【1】	・木細工【1】
画き方 書き方	・縦横線 ・物名 【1】	・縦横線 ・物名 【1】	・物形 ・物名 【1.5】	・物形 ・物名 【2】
数え方	—	—	・20位以下の計数 【1】	・30位以下の計数 【1】
集会	【6】	【6】	【6】	【6】
唱歌	・口授歌【3】	・口授歌【3】	・口授歌【3】	・口授歌【2.5】
遊嬉	【6】	【6】	【6】	【6】
実物	・実物指教【2】	・実物指教【2】	・実物指教【2】	・実物指教【2】
合計	7項目【20】	9項目【20】	10項目【22.5】	10項目【22.5】

（愛知県史編さん委員会編（2004）『愛知県史』資料編34、111～114ページを参考に筆者作成）

上記〈表2〉は、同幼稚園の保育内容一覧である。この表からは、同幼稚園では「集会」と「遊戯」が週あたり6時数もうけられており、毎日行われていたことがわかる。また5歳児ならびに6歳児に対しては、果物等を用いて者の数え方を教えていたこともわかる。また、4歳児以上には、「板」や「箸」や「環」の形状からなる「恩物」を活用した保育が行われていたことが判断できる。

さらに同規則〈表1〉を概観してみると、第八条において「遊戯」ならびに「唱歌」以外が子どもにとって「鬱屈」な「開誘」と認識されていたことが興味深い。「開誘」が終わ

るたびに、遊戯と唱歌を用いて、子どもたちにストレスを与えないよう配慮していたことがうかがえる。なお、同規則の第七条において、三の組及び四の組の保育時数は「三十分」とあるが、一の組と二の組が4時間であることを鑑みると、この「三十分」というのは誤りであると推測できる。

「愛知県史」によれば、同園は当時の世間一般の幼稚園に対する認識が乏しいにも関わらず、男児23名、女児18名を収容し、発展の方向に向かっていった。けれども、1889（明治22）年4月に愛知女学校の廃校に伴って、同園も閉園となった<sup>14)</sup>。開園からわずか1年の

ことであった。

さて、愛知県における二番目の幼稚園の開設は、1890（明治23）年に渥美郡豊橋町の私立豊橋幼稚園を待つわけだが、1889（明治22）年12月に枝徳二という人物が『大日本教育界愛知部会雑誌』第32号<sup>15)</sup>に「幼稚園ノ設置ヲ望ム」と題した論説を投稿している。このなかで枝は、「我愛知県ハ戸数三十一万五千余ヲ有シ人口百四十四万一千余ヲ有スルノ大県ニシテ爾カモ此内ニハ都市名邑ニ乏シカラサルニ拘ハラズ未ダ一個ノ幼稚園ダニコレナキハ其之ヲ設置セント欲ス」と述べ、愛知県は人口が多いにもかかわらず幼稚園がこの当時一つも設置されていないことを嘆いている。さらに「先ツ差当リ名古屋岡崎豊橋等ノ如キ各市街ニ之ヲ設ケンコトヲ欲スルモノニシテ其設立ノ方法等ニ至テハ之ヲ学校ノ附属トシテ市町村費ヲ以テ維持スルカ若クハ全ク有志ノ義捐ニ成立タシムルカハ其情況ニ従ハンコトヲ欲スルナリ嗚呼我県下数万ノ嬰兒ハ不幸ニモ無智盲昧ナル婢僕ニ放任スルニアラサレハ頑童黠兒ト伍同シクシテ有害無益ノ裏ニ空シク消光セルニアラスヤ之ヲ思ヒ之ヲ想ハ、幼稚園ノ設立実ニ一日も猶予スベカラサルナリ」と述べている。つまり、枝はとりあえずは人口が密集している名古屋、岡崎、豊橋に、どのような設置形態でもいいので速やかに幼稚園を設立すべきだと力説しているのである。そうしないと、愛知県下の幼児に悪影響を与えると嘆いてもいる。

(2) 愛知女学校附属幼稚園閉園以後、明治30年代までの愛知県における幼稚園設置状況その後、枝徳二の論説の影響はあったかどうかは不明なところではあるが、1890（明治23）年に渥美郡豊橋町に私立豊橋幼稚園（1894年廃園）が、1891（明治24）年に私立西尾幼稚園（1906年より休園）が、1892（明

治25）年には私立名古屋幼稚園（1899年に名古屋市へ移管）が開設された<sup>16)</sup>。豊橋幼稚園は高須広治によって開設され、西尾幼稚園は篤志家の寄附によって開設された。西尾幼稚園は、当初町立の計画もあったが叶わなかった<sup>17)</sup>。名古屋幼稚園も有志寄附金によって創設されたが、1895（明治28）年以降は市費より毎年300円の補助が得られるようになった。

その後も全国的に幼稚園が増設されるようになり、1899（明治32）年には「幼稚園保育及設備規程」（文部省令）が制定された。これは幼稚園に関する初めての独立規程である。同規程は、幼稚園への入学年齢（満3歳より就学まで）、保育時間（一日5時間）、保母一人あたりの担当幼児数（40人以内）、一幼稚園の規模（最大150人）、保育の要旨、保育項目、施設設備の種類と広さなどの基準を示している。同規程は、1877（明治10）年に制定された「東京女子師範学校附属幼稚園規則」をほぼ継承し、簡素化したものであった<sup>18)</sup>。

保育項目は「遊嬉」「唱歌」「談話」「手技」の四つが示された<sup>19)</sup>。「遊嬉」は随意遊嬉と共同遊嬉に分けられ、前者は幼児が自由に遊嬉・運動するもので、後の「自由遊び」にあたる。後者の共同遊嬉は、唱歌にあわせて共同で動作をするものであった。「唱歌」は平易な歌を歌うことによって、聴覚機能、発声、および呼吸器の発育を助け、心情を明朗にし、徳性を高めることとしていた。「談話」は幼児にとって有益で興味深い話をして正しい言葉を習得することも考慮されていた。また「手技」は「手及眼ヲ練習シ心意発育ノ資トス」ることである。この「手技」は「恩物」を一括したものである。というのも、これまでいくつかの恩物をそれぞれ独立したものとして取り扱ってきた煩雑さを改めた<sup>20)</sup>と解釈される。さらには、それまでのフレーベル方式による恩物中心の保育から脱し、新しい視

点に立って保育を考えようとした画期的な保育項目といえる<sup>21)</sup>。

さて、愛知県においても、明治30年代に入ると幼稚園の開設が相次いだ。以下に示す〈表3〉が、明治30年代までに愛知県に存在した幼稚園の一覧である。

愛知県下初の公立幼稚園である名古屋市立高等女学校附属幼稚園は、私立名古屋幼稚園が明治32年8月に移管されたことによって誕生した。私立名古屋幼稚園は明治18年度より市費の補助を受け、園児数も増加していたのだが、より一層の完整を期するために、名古屋市立高等女学校校舎の新築竣工を期に、名古屋市に移管を要請していた<sup>22)</sup>。

1900(明治33)年には額田郡岡崎町に私立岡崎幼稚園が、1901(明治34)年には名古屋市白壁町にカナダ聖公会宣教師マーガレット・M・ヤング<sup>23)</sup>により私立柳城幼稚園が設立された。ヤングは1898(明治31)に柳城保姆伝習所を開設し、保姆の育成も図った。同伝習所での保姆育成の形態は、幼稚園に必要な人数を順次育成していくものであった。よって基本的にはヤング対生徒の一对一の教育であった。ちなみに同伝習所の1898年から1922(大正12)年の24年間での保姆育成人数が28人であったことが分かっている。つまり、毎年必ず生徒を募集しなければならないというわけではなく、必要に応じて又は入学希望者がいれば養成するという状況であったといえよう<sup>24)</sup>。また柳城幼稚園の一日の保育内容は、大正2年に同伝習所を卒業し、柳城幼稚園で働いていた保姆(和田あき)のノートによると、次のようである<sup>25)</sup>。

保育プログラムの一つずつは大体20分位で、朝は円座になりイエス様のお話を聞き、その後聖句を一緒に唱える。聖句は「はじめに神、天地を造りたまえり。

神は愛なり。受くるより与うるは幸いななり。」などであった。第2時限目は恩物遊びである。1メートル×2メートルの大きさの机には縦横の線が書かれており、その上で園児一人に1箱ずつ渡された積み木を並べたり、積んだり、自由に何かを作ったり、時には何を作るか決めて遊んだ。思わぬよいものができて、皆で喜び合うことも多かったという。

そして外に出て遊び、また部屋でいろいろな遊戯・ダンスをする。1週間に一度は近くの草原や小山に遊びに行き、草の葉・笹の葉で何かを作ったり、草の名、花の名を教えたりした。

また、折り紙、たたみ紙、縫い、豆細工などもした。月曜日から金曜日まで保育をし、土・日は休み。しかし子どもたちのほとんどが日曜日は日曜学校へやってきた。教師は土曜日に延長と一緒に次の週の打ち合わせをした。

つまり、柳城幼稚園においても恩物を用いた保育が行われていたことが分かる。さらに、キリスト教を基盤とした保育活動が盛んであったことが物語られている。

1901年の柳城幼稚園の開設に続き、1902(明治35)年には、知多郡亀崎町に私立亀崎幼稚園が開設された。この幼稚園はキリスト教伝道師水野重事により有志者からの資金をもって設立された。こののち、1906(明治39)年には知多郡半田町に私立半田幼稚園が、愛知郡熱田町には私立熱田幼稚園が新設された。明治39年当時の愛知県下の幼稚園の一覧は下表に示すとおり、わずか8園(うちひとつは休園状態)であった。



〈表 3：明治39年度 愛知県内における幼稚園一覧〉

名称（所在地）	創立年	保育年限	クラス数	保母数	園児数 （男児）	園児数 （女児）
名古屋市立名古屋 高等女学校附属幼稚園 （名古屋市久屋町）	明治32年 （※明治25年に私立とし て創立、明治32年に名古屋 市へ移管）	3年	3	6	97	52
（私立）柳城幼稚園 （名古屋市白壁町）	明治34年	3年	3	3	28	22
（私立）亀崎幼稚園 （知多郡亀崎町）	明治35年	3年	2	2	19	19
（私立）岡崎幼稚園 （額田郡岡崎町）	明治33年	2年	3	3	53	48
（私立）豊橋幼稚園 （渥美郡豊橋町）	明治34年	3年	3	助手 2 見習 2	42	48
（私立）西尾幼稚園 （幡豆郡西尾町）	明治24年 ※明治39年度より休園			—	—	—
（私立）半田幼稚園 （知多郡半田町）	明治39年	3年	2	2	19	30
（私立）熱田幼稚園 （愛知郡熱田町）	明治39年	3年	3	2	54	46

（「愛知県学事第二十年報」明治39年（愛知県図書館所蔵）、229-230ページを参考に筆者作成）

さて、上記の〈表 3〉をみると、他の私立幼稚園と比して、市立名古屋高等女学校附属幼稚園では、園児数に対する保母の割合が高いことがわかる。けれども、「愛知県学事第十六年報」によれば「私立ニ係ル各幼稚園ハ概シテ設備不完全ナリト雖其成績ニ於テハ市立ニ係ルモノト同シク佳良ニシテ父兄ノ希望ヲ満足セシムルニ足ル」とあり、私立幼稚園は市立幼稚園と比して保育設備はいいものではなかったが、子どもの成績は市立幼稚園の子どもたちを大差なく、保護者も満足していたことされる。とはいえ、当時幼稚園に通うことができた子どもたちは、上層階級の子弟であった。「愛知県学事第十九年報」には「入園園児ハ比較的家庭ノ良好ナルモノ、子弟多クシテ最モ入園保育ヲ受クヘキノ必要アル下流社会ニ至リテハ却ツテ尠ナルノ憾アリ」とあり、下層階級の子どものための保育の必要性を感じながらも、実際の幼稚園教育は、

この当時は上流階級の子弟のためのものであったといえる。

#### おわりに

以上、本稿では、伊澤修二によって行われたとされる幼児教育実践について考察し、さらには伊澤以降の愛知県における幼稚園開設の動きについて分析を行った。

その結果、愛知県における明治期の幼児教育は、日本初の幼稚園である東京女子師範学校附属幼稚園と同様に、「恩物」を幼児保育の中心として活用されていたことが明らかとなった。しかしながら同県下の幼稚園数がたった8園にとどまっていたことを考えると、幼稚園の開設状況に関してはまだ胎動期であったといえる。愛知県下に幼稚園が一つもなかった当時、枝徳二が幼児教育の重要性、ならびに幼稚園開設の必要性を説いていたことは非常に興味深い。そして保育の対象が本来保育

を受けるべきであろうとされる貧しい家庭の子どもたちではなく、富裕層の子どもたちであったことを考えると、幼稚園に対する人々の理解も県民全体には浸透していなかったと理解できる。

伊澤による幼児教育の実践は、「幼稚園」という施設で行われたという確固とした証拠はないのであるが、その後の幼児教育、ならびに初等教育の普及ならびに教員養成に大きな貢献をしたことを考えると、伊澤の愛知師範学校での試みは幼児教育の歴史において看過することはできない。

今後は、本稿の考察で活用できなかった史料を発掘することにより深く考究してゆきたい。とりわけ未だ発見されていない伊澤修二による「幼稚園」設置に関する史料、加えて枝徳二による愛知県における幼稚園設置運動に関する史料の発掘に努めたい。また今回記載した明治期の愛知県における8つの幼稚園の発達の様相を、保母（幼稚園教諭）養成ならびに保育内容の面からより詳細に検討したいと思う。このような分析を通して、明治期における愛知県の幼稚園教育の全貌を明らかにしていきたいと思う。

#### 主要参考文献

- 愛知県（1904, 1905, 1906）『愛知県学事年報』
- 仲新（1967）「官立愛知師範学校と伊澤修二」『信濃教育』972号、信濃教育会
- 日本保育学会編（1968）『日本幼児保育史』第一巻、フレーベル館
- 愛知県教育委員会編（1973）『愛知県教育史』第三巻、図書印刷
- 岡田正章編（1983）『世界の幼児教育 2 日本』、日本らいぶらり
- 愛知県史編さん委員会編（2004）『愛知県史』資料編34

#### 注

- 1) 森上史朗編（1998）『幼児教育への招待—い

- ま子どもと保育が面白い—』、ミネルヴァ書房、46ページ。
- 2) 日本保育学会編（1968）『日本幼児保育史』第一巻、フレーベル館、58ページ。
- 3) 細谷俊夫ら編（1900）『新教育学大事典』第1巻、第一法規、102ページ。
- 4) 仲新（1967）「官立愛知師範学校と伊澤修二」『信濃教育』972号、信濃教育会、16～17ページ。
- 5) 同上。
- 6) 同上、17ページ。
- 7) 伊澤修二君還暦祝賀会編（1988）『楽石自伝教界周遊記』、大空社伝記叢書23、23～24ページ。
- 8) 細田淳子（1997）「保育における音楽教育の歩み—伊澤修二の音楽教育観」『東京家政大学研究紀要』第37集、157～163ページ。
- 9) 山住正巳（1971）『洋楽事始—音楽取調成績申報書』、平凡社。
- 10) 森下正夫（2009）『—明治文化の至宝—伊澤修二』、伊那市教育委員会、14ページ。
- 11) 伊澤修二（1901）「幼児に課する唱歌遊戯の話（説林）」『婦人と子ども』、第1巻第1号、64ページ（お茶の水女子大学教育・研究成果コレクションTeaPot所収）
- 12) 愛知県教育委員会編（1973）『愛知県教育史』第三巻、図書印刷、834～835ページ。
- 13) 同上。
- 14) 同上、837ページ。
- 15) 本稿では、愛知県史編さん委員会編（2004）『愛知県史』資料編34、114～119ページに掲載された史料を活用した。
- 16) 愛知県教育委員会編、上掲書、837～840ページ。
- 17) 同上。
- 18) 岡田正章編（1983）『世界の幼児教育 2 日本』、日本らいぶらり、37ページ。
- 19) 森上史朗編、前掲書、83～84ページ。
- 20) 岡田ら、前掲書、37ページ。
- 21) 同上。
- 22) 愛知教育委員会編（1973）前掲書、840ページ。
- 23) ヤングは1896（明治26）年の春、金城女学校を卒業したばかりの杉浦いねを自分の日本語の教師とした（柳城学院百年史編纂委員会編（2004）『柳城学院百年史』、28ページ）。
- 24) 柳城学院百年史編纂委員会編（2004）、上掲

明治期における幼児教育の展開（青山 佳代）

書，58～59ページ。  
25) 同上，54ページ。